第41号（2023年冬～2024年）

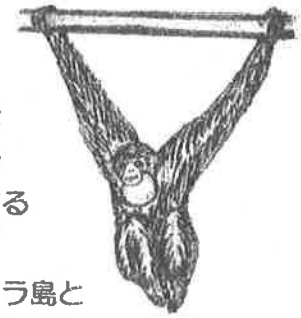
編集・発行　千葉市動物公園ボランティア

千葉市動物公園の見どころ7 セブンプラス

★それぞれの動物がいる場所はウラの地図をごらんください

① 当園名物、息の合ったデュエット
― フクロテナガザル ―

「ホウホウホウ」という大きな声が聞こえてきたら、それはフクロテナガザルの歌声です。オリがなくて見やすい池の中の島で、のどの袋をふくらませて鳴きかわすカップルが、足より長い腕でウンテイをつたって素早く移動する姿は、まるでショーを見ているよう。足でニンジンをつかみながら、器用に腕渡りする姿を見られることも。



野生ではマレー半島やスマトラ島という暖かい所にいるので、寒い日本の冬は小屋の中のヒーターをつけているそうです。エサは野菜、リンゴ、ゆで卵やヨーグルトつき食パンなど。２頭ともとても長生きで、オスのブレイブとメスのハートは30年以上仲良く暮らしています。ゴリラの向かいのオリにメスの茶々がいて、少し離れていますが、鳴きかわしてコミュニケーションをとることもあります。

②するどい目つき 精悍な姿
― オジロワシ―

ワシとタカのちがいを知っていますか？同じタカ目タカ科の鳥の仲間で、大きい方をワシ、小さい方をタカと呼びます。ワシは脚の下の方まで羽があり、タカの脚には羽がありません。

オジロワシはオスよりメスが大きく、つばさを広げると最大2.4メートルにもなり、日本に生息する鳥類でもっとも大きな体をしています。多くは冬が近づくとシベリアから越冬のため北海道に渡ります。絶滅危惧種に指定されているオジロワシを見ようと北海道ではバードウォッチングツアーが開催されますが、北海道まで行かなくても当園で貴重な姿を身近に見ることができます。

当園の２羽はオスとメスで、肉食の猛禽類ですからエサは鶏頭、ひよこ、魚のアジなどです。

③よく動く鼻でエサさがし
― アカハナグマ ―

鼻が赤いわけではなく、毛色が赤く見えるハナグマの仲間。90度くらい曲がる柔らかくて長い鼻と、地面を掘るために発達した前足が特徴です。生息地は中央アメリカから南米北部。野生では木の実やキノコ、昆虫、ネズミ等を食べ、園ではリンゴや煮たサツマイモ、ゆで卵、鶏頭、カイコ等を食べています。オスのヒカリとメスのピーチ、２頭とも好物は鶏頭だそうです。

耳を澄ますと、高い声でキュウキュウと鳴くのが聞こえることがあります。木登りも得意。飼育係さんは高い所や落ち葉の下などにエサをかくして退屈させないように工夫しています。朝一番や２頭が交代する昼過ぎには、かくしたエサをさがして食べる姿を見ることができます。

④小さいながらも 威風堂々
― ヒロハシサギ ―

中央アメリカに生息するサギの仲間で夜行性。園ではワカサギやアジ、オキアミを食べています。特徴は、名前の通り幅の広い独特な形をしたくちばしと、夜でも良く見える大きな目、そして背中まで伸びた黒い冠羽です。くちばしの形はハシビロコウに似ていて、求愛のときにはそのくちばしを打ち鳴らす「クラッタリング」をします。トキ・キジ舎にいるほかの鳥より体も小さく色も地味ですが、堂々と落ち着いた姿が魅力的。意外と人なつっこく、お気に入りの飼育員さんについて歩いたり、手からエサを食べたりするそうです。

じっとしていることが多く、どこにいるのか見つけにくいかもしれませんが、個性的な姿のヒロハシサギに会いに来てください。

★それぞれの動物がいる場所は下の地図をごらんください

⑤ヒツジとのちがいがわかるかな？
― ヤ　ギ ―

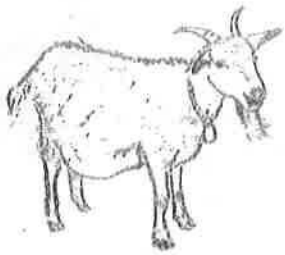
エコな除草法としてレンタルヤギが登場するなど、ヤギは今、人気上昇中の家畜です。ヒツジとどこがちがうでしょうか。

ヒツジはもっぱら毛を利用するために改良されてきたので、柔らかい毛が伸び続けますが、ヤギの毛は硬い手触りで一定以上伸びません。

ヤギのツノは後ろ向きに生え、ヒツジのツノはうずまき型。ただしどちらもツノの生えないものもいます。

ヤギにはアゴヒゲがありますが、ヒツジにはありません。ヤギの尻尾は短くやや上向きでよく動き、ヒツジの尻尾は垂れています。

ヒツジが柔らかい草しか食べないのに対し、ヤギは草のほか木の皮や実、枝などもOK。活発で高い所に登るのも好きです。



鳴き声は
ヤギはメェエェエェエェ
ヒツジはメーーーッ
「ふれあい動物の里」で
聞きくらべてください。

⑥熱帯雨林の奥深く、静かに暮す
― ボールニシキヘビ―
（ボールパイソン）

当園では２種のヘビが展示されています。身近に生息するアオダイショウとアフリカ中部に生息するボールニシキヘビ。どちらも毒はなくおとなしい性格です。

ボールニシキヘビはニシキヘビの中では小柄な方で、当園の個体は体長 1 メートル位、体重は 1850ｇほど。野生では小型ほにゅう類を食べ、園では１か月に１度ネズミを１匹与えています。

まぶたがないので目を閉じることがなく、用がなければじっとしているので、寝ているのか起きているのかわかりにくいです。目は薄い膜で保護されていて、脱皮するときには目の膜も一緒に脱げます。

おどかされるとボールのように丸くなるのでこの名前がついたそうですが、当園では大切に可愛がられているので丸くなるところはだれも見た事がないとのこと。皆さんもそっと観察してくださいね。「ふれあい動物の里」で展示されています。

⑦はっぱをモグモグ、よくかんで食べる
― アミメキリン ―

東アフリカ大陸のサバンナに生息しているアミメキリン。

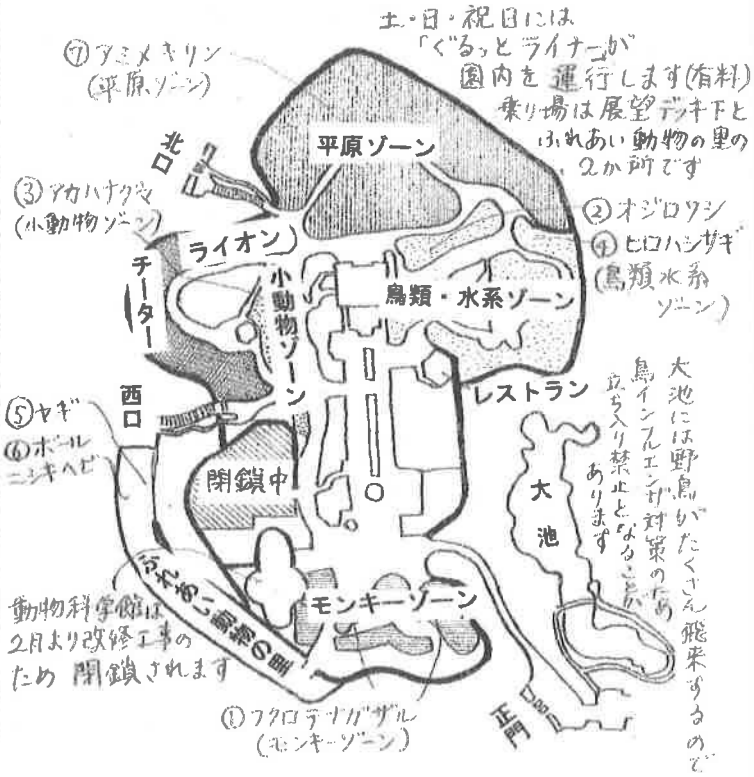
その長い首は、高い所の木の葉や実を食べるのに役立つほか、オス同士が争うときにぶつけあったりします。

胃が４つあり、ウシやヤギのように１度飲んだ食べ物を口に戻して噛み直す「反すう」をします。当園の２頭も首のあたり（のど）をよく見ていると食べ物が口から降りていき、また上がってくるのがわかるでしょう。

オスのヨウタは 2014 年茶臼山動物園から来て現在 11 歳。身長は４m50 ㎝ほど。性格はおとなしく人に慣れています。

メスのコノカは 2022 年宇都宮動物園から来てもうすぐ５歳。身長は３m40 ㎝ほど。ヨウタにくらべると少し臆病な性格です。

エサはヤマモモ、シラカシ、サクラ等園内の木の葉や生の牧草、マメ科の乾草、草食動物用のペレット（固形飼料）等。２頭は１日ごとに交代で展示場に出ています。



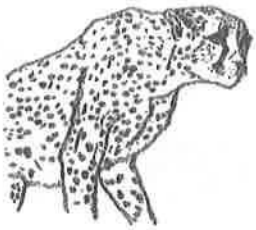
第42号（2024年春）

編集・発行　千葉市動物公園ボランティアーズ

千葉市動物公園の見どころ7 セブンプラス

★それぞれの動物がいる場所はウラの地図をごらんください

①陸上最速の野生動物
― チーター ―



陸上最速で身体のシルエットが美しいネコ科の動物。そのスタイルを保ち健康に暮らしてもらうため、5日に1回絶食日を設けたり、エサの量を調整したりと飼育係さんは日々努力しています。

♂フィン、フロド、フラッシュ

チェコ出身の3つ子。とても仲が良く、1頭でも引き離すと互いに強いストレスを感じるようです。天気の良い日に日なたぼっこする姿も癒されますが、寒い日や雨のときも意外に元気に歩き回っています。

♀ズラヤ、アジャブ

ノルウェー出身のズラヤ、フランス出身のアジャブは2歳違いでズラヤが年上です。たいていのおとなのメスは単独で暮らすので、同じ場所に2頭を入れるとケンカしてしまうおそれがあり、基本的に展示時間と生活場所は分けられています。

②エサやり体験できます
― アルパカ ―

「ふれあい動物の里」には2頭のメスのアルパカがいます。茶色のミッティー（8歳）と白いキャンディー（13歳）。近くで見ると目がすごくきれいです。

ラクダやラマと共通の祖先をもつ家畜で、北米大陸にいた動物がアジア・アフリカに渡って砂漠の暮しに適応したラクダとなり、南米に渡って山岳地帯の荷物運びなどに用いられるラマと、毛が利用されるアルパカになったと考えられています。

ヒツジと同様、毛がどこまでも伸び続けるので、園では毎年春に毛刈りをします。エサは牧草とペレットで、大好きなペレットをフライパンに入れてあげると掃除機で吸い取るみたいに一瞬でなくなります。上の前歯はなく、下の前歯は伸び続けてしまうので時々切るそうです。

③頭の羽がキュート
― キンクロハジロ ―

キンクロハジロは冬になるとシベリアから渡って来て、身近な川、池、海などで冬を越します。十数羽ほどの群れでいることが多く、千葉市内を流れる花見川でも見ることができます。よく似た種にスズガモがいますが、大きな違いはキンクロハジロの頭には冠羽と呼ぶ長めの羽があること。一見すると冠羽は寝ぐせがついた髪のよう見え、この野鳥の最大のチャームポイントです。眼が金色で、体が黒く、つばさを広げると前部が白いことから和名で「金黒羽白」と呼ばれています。園内にはオスとメスが1羽ずつ飼育されており、過去に一度産卵したことがあるので繁殖の可能性があります。いつか卵がかえりヒナの姿が見られる日が来るのを期待したいですね。

④ぬかるみ対応型のヒヅメ
― シタツンガ ―

茶色い体に白い模様、見た目はシカのようなシタツンガはウシの仲間です。アフリカの中部から南部の湿地や沼地で暮らし、危険を感じると走って逃げたり、水中に飛び込んで鼻先だけ水面に出して隠れたりします。水辺に生えるアシなどを食べますが、園では乾草やペレットを食べています。

一番の特徴は足で、長いひづめが広がってぬかるみも沈まずに歩けます。寒い日は日当たりの良い場所でのんびりしていますが、夏には水場で水につかりながら過ごす姿も見られます。オスにはらせん状の立派な角があり、ウシの仲間なので生え変わることはなく、一生伸び続けます。

シタツンガという名前を初めて聞いた人が多いと思います。平原ゾーンに会いに来てください。

⑤美しい毛並みが魅力

― ブラッザグエノン ―

モンキーゾーンで一際目を引くサルがいます。前頭部にオレンジ色の三日月型の模様。鼻の周りから口の周りにかけて白いひげがあるサルの名前は「ブラッザグエノン」です。

当園のブラッザグエノンは、一番、身体の大きいお父さんのユッケ、お母さんのマドカ、長男のノア、長女のノン、そして昨年の夏に生まれた次女のノノの5頭家族です。食べ物は根菜類やくだものですが、冬場は温州みかんなど冬みかんが好物です。屋内展示場に戻る3時頃に夕食をあげていますが、最初に食べ物を取りに来るのがノアです。

飼育員の樽川さんは「顔以外にも注目してほしいのは、一見すると地味な灰色の背中ですが、実は複雑に色々な色が混ざり合っている毛並みもご覧いただきたい」と観察ポイントを上げています。

⑥声と表情でコミュニケーション

― チンパンジー ―

アフリカ西部から中央部の森林やサバンナで群れを作って生活するチンパンジー。声と多彩な表情で群れの仲間とコミュニケーションをとり、人の3歳並みの知能をもつとされています。果物、植物の葉、花、種子、樹皮、樹液、昆虫、小動物を食べ、夜は木の上に小枝や葉でベッドを作り休みます。

当園のオスのサンタとメスのジージョは1985年4月にアフリカのギニアから来園、現在共に39歳位。兄妹のように育ち、繁殖にはいたらないようです。サンタは体重50kg弱、チンパンジーの中では小柄でジージョはサンタよりかなり小さいです。エサはニンジン、サツマイモ等野菜、リンゴ、バナナ、オレンジ等果物、ごはん、食パン、ペレット、それにサンタだけヨーグルトが加わります。

★毎月第2、4日曜11時～12時半に園内でボランティアが「Zooポラクイズ」をしています。どなたでもご参加ください。場所は園内放送でお知らせします。

★それぞれの動物がいる場所は下の地図をごらんください

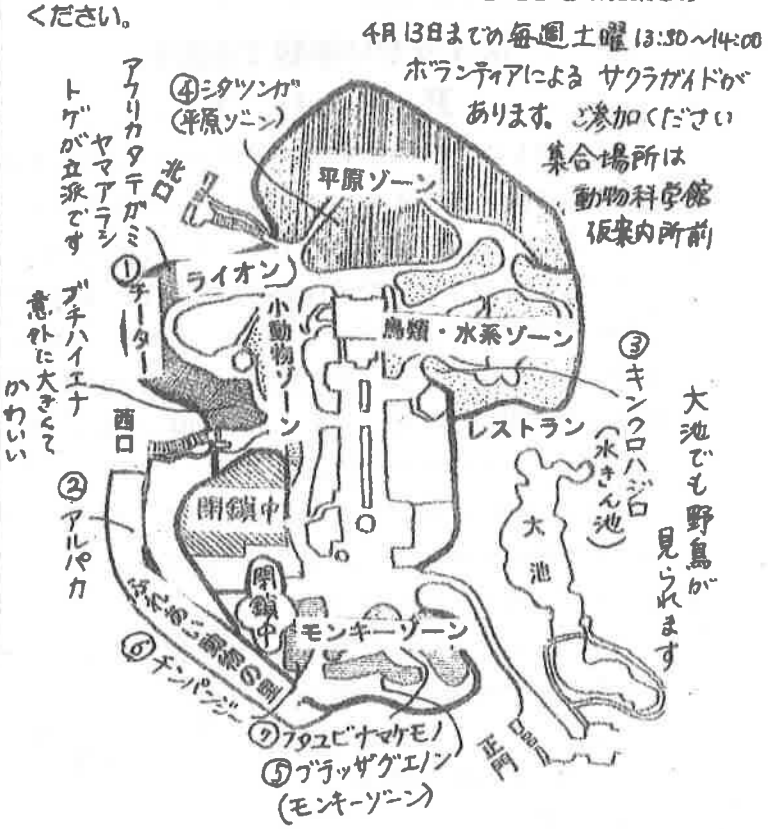
⑦まじめに省エネ生活しています

― フタユビナマケモノ ―

南アメリカ北部の熱帯雨林に生息するフタユビナマケモノは、曲がった長い爪を木の枝などに引っかけてぶら下がり、あまり動かないユニークなライフスタイル。動作はゆっくりとして風景に溶け込み、天敵から身を守ります。体の毛は雨水が下に落ちるようにお腹から背中に向かって生えています。

バードホールにいたテラスと2023年5月生れのひなた母子がモンキーゾーンに移動しました。ぶら下げてある野菜や大好きなサツマイモを2本の爪で押さえて食べます。3月現在、ひなたはまだ母親のお腹の上で生活しています。バードホールでは夜間に親から離れるところも見られましたが、移動してからはまだ確認していません。これから少しずつ新しい環境に慣れていくことでしょう。展示場では止まり木にしがみついていることが多いので、上の方を探してみてください。

★園内にはソメイヨシノのほかにもいろいろな桜があります。各ゲートにある「桜の見どころ満載マップ」を参考にお楽しみください。



第４３号（2024 年夏）

編集・発行　千葉市動物公園ボランティアーズ

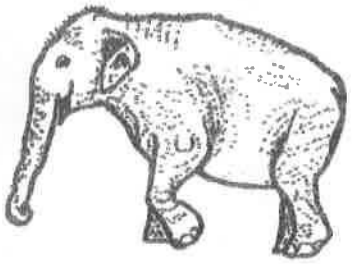
千葉市動物公園の見どころ7 セブンプラス

★それぞれの動物がいる場所はウラの地図をごらんください

①水遊び大好き
― アジアゾウ ―

ゾウはその長い鼻で、上手に食べ物をつかんで口に持っていったり、吸い込んだ水を体にかけたり、敏感に匂いをかぎ分けたりすることができます。

当園のアジアゾウ、メスのアイちゃんは、時には吸い上げた水を砂地までわざわざ運んで泥を作り、どろんこになって遊ぶことも…。ドロドロになったアイちゃんに飼育員さんが水をかけて洗ってあげるそうです。まるで泥遊びを楽しんだ子どもとお母さんのようですね。



水が大好きなゾウのために、夏場は１日２回のシャワータイムがあります。また、ほぼ毎日、飼育員さんの指示で足や鼻を上げたりして、健康チェックをやりやすくするためのトレーニングも行なっています。

②好きな食べ物は肉と虫
― ミーアキャット ―

2016 年にライオンが来るまで、ミーアキャットは当園の代表的な肉食獣でした。寝てばかりいるライオンにくらべれば、絶えず周囲に気を配り、ときどき後足で立ち上がって警戒の短い鳴き声を出すなど、体が小さいぶん野生では危険も多いことがわかります。当園でのエサは馬肉、鶏頭、蒸したサツマイモとニンジン、リンゴ、ゆで卵など。虫が飛んでくれば捕って食べることもあります。

野生ではアフリカ南部の乾燥地帯に群れですみ、昆虫、クモ、サソリなどを食べます。前足の長いツメで穴を掘って巣を作り、天敵が来ると穴に逃げ込みます。

展示場には人工の地下通路とアリ塚のような２つの山があり、その片方はエサのミールワームを下から取り出せる仕掛けで、もう片方は冬に使用する暖房機が入っています。

③ツクシの国の…
― ツクシガモ ―

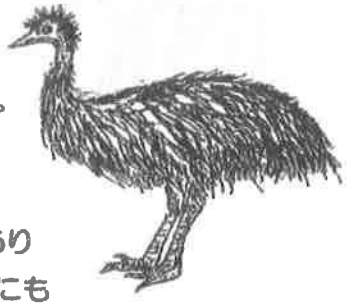
ツクシガモは冬に欧州北部沿岸やアジア中央部から日本の九州北部地方に渡って来ます。九州北部の昔の名が「筑紫」と呼ばれていたのでこの名が付けられたそうです。現在は諫早湾の干拓事業により生息環境が変化したこともあり、北部九州以外に瀬戸内海や大阪湾沿岸にも姿が見られます。関東地方ではごくまれにしか見られません。

カモ類では珍しくオスメス同色で見分けがつきにくいですが、オスは繁殖期にクチバシの上部がこぶ状に盛り上がるので、注意すれば見分けることが出来ます。チャームポイントは首を地面に長く突き伸ばしてエサをこしとる仕草。当園の水禽池にいる３羽も時おり水たまり辺りでこの仕草をしているのが見られます。

④羽毛の中に　かくれたつばさ
― エミュウ ―

鳥類の中でダチョウに次ぐ世界で２番目に大きい鳥。当園のエミュウはハシビロコウ隣の池のある展示場にいるオスの「サンバ」と、オオカンガルーと一緒にいるサンバの子のメスの「エーチャン」です。

ダチョウとよく似ていますが決定的な違いは足指の数で、鳥類の多くは４本ですが、ダチョウは２本、エミュウは３本です。飛べない鳥ですが、深い羽毛に埋もれた長さ 20 センチほどの２つの翼があり爪もあります。また、羽根にも特徴があり、２本の羽根が根元でつながっています。



性格は穏やかで優しい鳥だと言われています。サンバも柵の近くまで寄ってきますので、その愛くるしい目や特徴的な翼、足などを観察してみて下さい。

⑤ゴージャスな かみかざり
― カンムリバト ―

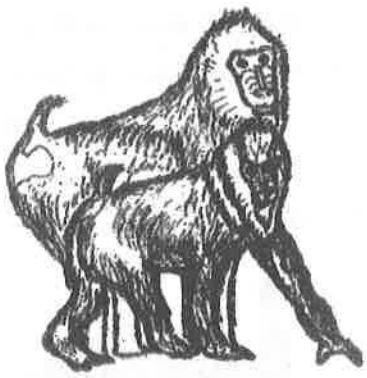
インドネシアの熱帯雨林にすむ世界最大級のハトの仲間で、頭にレースのような冠状の大きな羽があり名前の由来となっています。全身は青灰色、肩と背中に赤色の斑、翼に白色の斑があり、目の虹彩はきれいな赤色で威厳のある姿をしています。

当園にいるのは2006年6月生まれのオスで、現在JAZA所属の動物園で飼育しているのはこの1羽だけとなっています。近くに寄ってきてこちらをじっと見つめたりしますが、人なつこいわけではなく、飼育員さんも時には威嚇されることがあるそうです。オスとメスは外見にちがいはないそうです。

（JAZA：公益社団法人日本動物園水族館協会）

⑥色彩豊かな熱帯雨林の住人
― マンドリル ―

アフリカ赤道付近の熱帯雨林で生活しています。赤い鼻、青いほっぺ、黄色いヒゲ、カラフルなお尻、茶色の体毛もキラキラと輝きその姿に心を奪われます。この特徴的な色は昼間でも暗い熱帯雨林の中でも目立ち、群れで暮らすマンドリルにとって、仲間を見分けるのに役立っていると考えられています。オスはメスよりずっと大きく、その体格差も特徴の1つです。



野生での生態はまだ良く知られておらず不思議がいっぱいのマンドリル。

オスのヒカル（9才）メスのモモ（25才）そして一昨年来園して、今年2月から同居を始めたマリー（4才）。この3頭の関係性がどうなっていくのかも気になるところです。ヒカルは顔の色も濃くなってきて、年齢的にもオスの魅力が増しています。

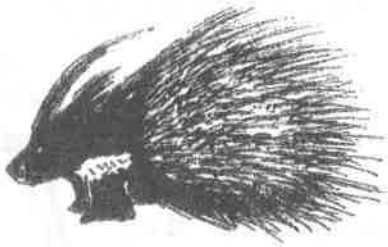
★6月13日にプラッザグエノンのマドカが4頭目の赤ちゃんを出産。赤ちゃんはしっかり母親に抱きついています。総勢6頭のにぎやかな家族になりました。

★それぞれの動物がいる場所は下の地図をごらんください

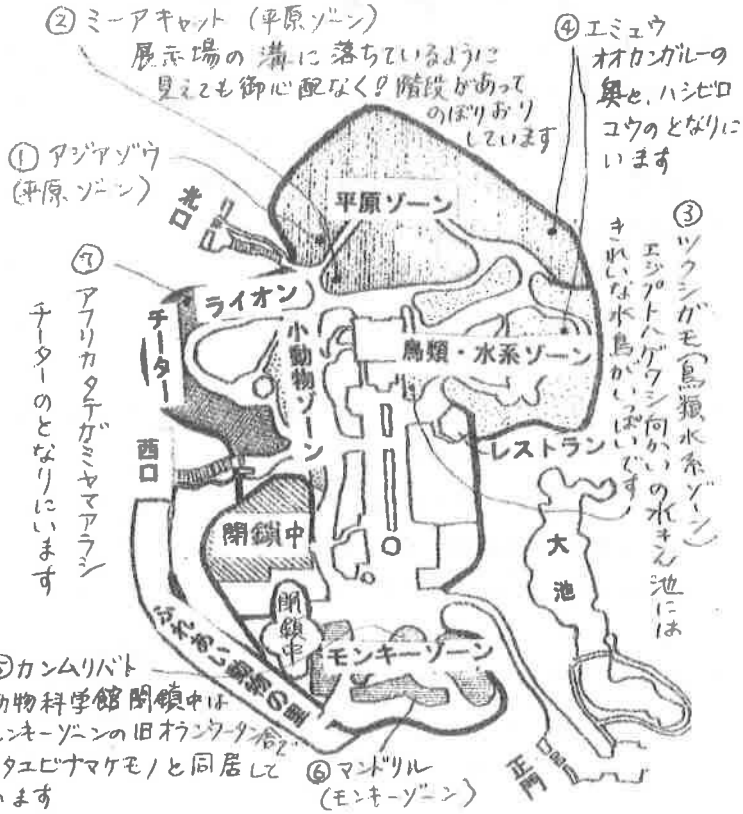
⑦するどいトゲで身を守る
― アフリカタテガミヤマアラシ ―

ときどきハリネズミとまちがえられますが、当園にいるのはヤマアラシで、体重は15kg位。全身の毛が針のように変化した、アルミ缶をも貫く硬く鋭い針毛（トゲ）を身につけ、興奮したり危険を感じた時はこのトゲを逆立て体を2倍に見せます。トゲはうしろ向きに生えているので、敵に尻から挑んでいく珍しい動物です。

2021年に来園したミクニ（メス10歳）とホルン（メス9歳）に、一昨年アマンダ（オス7歳）が加わりました。夜行性で昼間は巣穴で休息していることが多いですが、朝夕には活動するので針毛を逆立てた姿を見るチャンスがあるかもしれません。昼間の寝姿で、もし足がこちらを向いていたら、ぜひ足のウラに注目してください。人間の赤ちゃんの足にそっくりです。



★ヤマアラシのミクニが6月5日に赤ちゃんを出産しました。父親はアマンダ。7月1日現在、性別は不明ですが元気に育っています。園HPで写真をごらんください。



第４４号（2024 年冬～2025 年）

編集・発行　千葉市動物公園ボランティアーズ

千葉市動物公園の見どころ7 セブンプラス

★それぞれの動物がいる場所はウラの地図をごらんください

①牛骨をもかみ砕く
― ブチハイエナ ―

アフリカのサバンナに生息し、メスを中心とした「クラン」と呼ばれる群れで暮らしています。

当園のブチハイエナは、メスは慎重な性格のイトゥバとやんちゃでよく鳴くエサンドワ、オスはちょっぴり臆病なトーフの計３頭です。

野生ではシマウマやヌーなどの動物を食べます。園では馬肉、鶏頭、牛骨などを与え、２週に１回ほど屠体給餌としてイノシシやシカの脚などを与えています。週２回は絶食日です。

トーフは高知県立のいち動物公園で生まれ、2023 年 10 月に来園。新しい環境に慣れるまでに時間がかかりましたが、2024 年６月に満を持して展示場デビューしました。奥の見えづらい場所にいることも多いですが、やさしく見守ってください。

②優美なたたずまいの　アフリカのツル
― ハ ゴ ロ モ ヅ ル ―

草原ゾーンの丘で、うすい水色のすっきりと清楚な立ち姿を見せている鳥はハゴロモヅル。南アフリカ共和国の国鳥です。風切羽根の一部が黒く長く、天女の衣にたとえられます。野生では南部アフリカの乾燥した草地で暮らし、草や虫などを食べます。当園でも草むらの虫を探して食べる姿が見られますが、エサは閉園後に部屋にもどってからツル用のペレットを食べています。

展示されているケイコという名の９歳メスのほかに 34 歳メス１羽が非展示施設にいます。寿命は 20～50 年。ケイコは人に育てられたので人を仲間だと思っているらしく、飼育係さんが展示場に入るとそばでダンスを踊ってアピールすることがあります。

③木を切り、運ぶ　働き者
― アメリカビーバー ―

ネズミの仲間でカピバラの次に大きく、北米の水辺に棲み、一生のび続ける前歯で木を切り倒してダムや巣をつくります。オールのようなしっぽ、後ろ足に水かきがあり、水中でも目を開けて動き回れます。

当園ではキン（オス８歳）とマツコ（メス７歳）が展示場のドームを巣にしています。中をのぞくとあおむけに寝ている無防備な姿が時々見られます。２頭とも体重は 14 kg位、体長は 70～90cm で尾が 30～40cm ほど。夜行性で基本は夜に動きますが、午後３時以降には平たい尾で舵を取り泳いだり、エサ（コマツナ、キャベツ、ニンジン、サツマイモ等）を食べたり、前歯が伸びすぎないように丸太をかじっている姿が見られるかもしれません。ムームーと鳴き声を聞けることもあります。

④声はすれども姿は見えず
― コジュケイ ―

県内で農耕地や雑木林を歩いていると、野鳥の甲高く大きい声が「チョットコイ」と聞こえることがあるものの、どこを探しても姿は見つけられません。その声の主がコジュケイです。

原産は中国で、1920 年頃日本で狩猟用として放鳥されたものが野生化したと言われています。キジ科の野鳥でやぶの中に棲み、ウズラに似てズングリとした体型ですが、案外敏捷で、危険を察知すると小走りで逃げたり低木の枝に止まったりします。オスとメスはほぼ同じ外見ですが、オスは脚の後ろにケヅメがあるので区別できます。宅地造成などで生息エリアが狭まり生息数は減少していると思われます。野生では見つけにくいその姿を、当園で確かめてみてください。

★それぞれの動物がいる場所は下の地図をごらんください

⑤ゴリラ界の女王モモコ
― ニシゴリラ ―

日本の動物園で暮らしているゴリラは何頭でしょうか？

当園のシンボルマークになっているゴリラは、野生からの輸入が禁止されている希少動物で、現在日本の６つの動物園には20頭（オス10・メス10）が暮らしています。

（モモコ in 上野動物園）

本来群れで暮らす動物で、上野動物園・東山動植物園・京都市動物園の３園では家族での生活をしています。1990年代から繁殖を目的として始まったブリーディングローンという仕組みにより、当園所有のモモコが上野動物園に貸し出され、３女２男の繁殖に成功。20頭のうち当園の所有はモンタ（千葉）、モモコとその娘のモモカとスモモ（上野）、モモコの息子モモタロウと孫ゲンタロウ（京都）の6頭です。国内のゴリラを動物園で協力して守っていきたいですね。

⑥サル山は平和な社会
― ホンドザル ―

ニホンザルのうち、本州、四国、九州に生息するものはホンドザル、屋久島にいるものはヤクシマザルと呼ばれます。野生ではメスを中心とした群れをつくり、オス同士の力関係はありますが、いわゆる「ボス」や「リーダー」といった役目はありません。

当園には９月現在メス15頭、オス10頭のホンドザルがいます。最年長はメスのレモン、29歳。最年少は2023年生まれの３頭の子ザルです。激しい争いなどはなく、みんな仲良く暮らしています。

エサは野菜・くだものとペレット（固形飼料）を、朝は展示場内で、夕方は室内で食べます。不定期に小麦を与えることもあり、小さな小麦を器用につまんで食べる姿も見られます。

子ザルたちが遊ぶ平和な光景はいつまでも見ていたくなります。

★ボランティアが毎月第２、第４日曜にご家族で参加できるクイズ形式の動物ガイド「ZOOボラ・クイズ・DEガイド」をしています。当日園内放送でお知らせしますので、ふるってご参加ください。

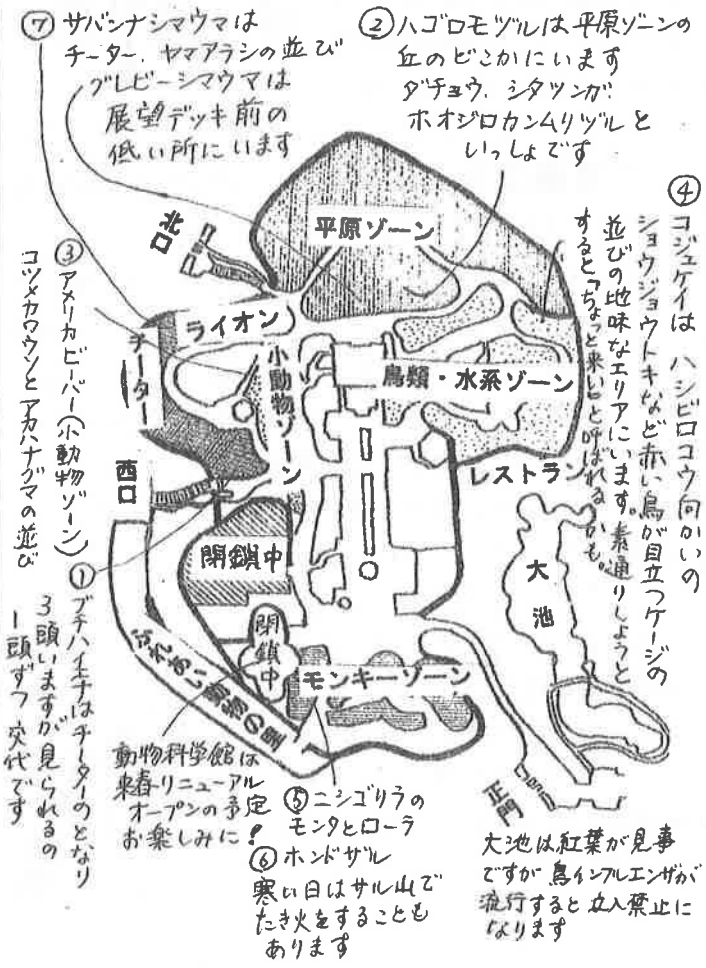
⑦どこがちがうかな　くらべてみてね
― シマウマ ―

シマウマは大きく分けるとグレビー、サバンナ、ヤマシマウマの３種がいますが、当園ではグレビーとサバンナの２種を飼育しています。

グレビーシマウマはケニアとエチオピアの一部地域に生息し、体が最も大きく縞模様は幅が狭く細く、腹部には縞がありません。その美しさのために毛皮目的の乱獲等により絶滅危惧種となっています。

（サバンナシマウマ）

サバンナシマウマはアフリカ東部・南部のタンザニアやケニアなどのサバンナや草原に広く分布し数も多く、家族単位の群れで生活し、天敵から身を守るためキリンやヌーなどの草食動物と一緒に行動することもあります。ウマよりもロバに近い動物ですので「ふれあい動物の里」にいるウマやロバとも比べてみてください。チェックポイントはたてがみ、しっぽ、鳴き声です。



第45号（2025年春～夏）

編集・発行　千葉市動物公園ボランティアーズ

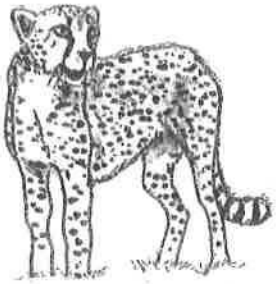
千葉市動物公園の見どころ7 セブンプラス

★それぞれの動物がいる場所はウラの地図をごらんください

①全力疾走が見られるか
― チーター ―

当園にはオス３頭メス２頭のチーターがいます。オスは兄弟で仲が良く、屋外だけでなく屋内でも食事の時以外は一緒に過ごしているそうです。野生下でもメスは単独行動ですがオス同士は協力して生活している例もあるようです。

超高速ランナーの姿が見られる「チーターラン」への出場は交代です。個体にも特色があり、ちゃんと走る・ショートカットする・走らない等、個性があるそう。動くものに反応するので、休園日に飼育員さんが放飼場のそばを自転車で通ったら追って走り出したこともあったとか。「チーターラン」で追うのは疑似餌ですが終わるとごほうびの肉が用意してあるそうです。実施日等の詳細は千葉市動物公園のホームページでご確認ください。



②ひなたぼっこ姿にいやされる
― ワオキツネザル ―

マダガスカルの乾燥林に群れで暮らします。樹上で眠り、夜明けに起きて果実・若葉・昆虫等を採って食べ、日中は地上にいることが多く、日が暮れたらまた樹上で寝ます。長い尾の役割は①樹間でのバランスとり　②仲間を確認③オスは分泌物を尾にこすり自分の位置を知らせる等。たまには寒い時のマフラー代わりにもなっているように見えます。一般的に体長は40～50cm、尾は50～60cm。体重は3～5kg。

サル比較舎にいるのはメスのジュリー(12才)、池に囲まれた島にいるのがオスのクラフト(12才)と長崎の動物園からきたコボ(28才)です。エサは一口サイズにカットした果物や野菜類。性格、気質は総じておだやかで、ネコに似た声で鳴くことがあります。

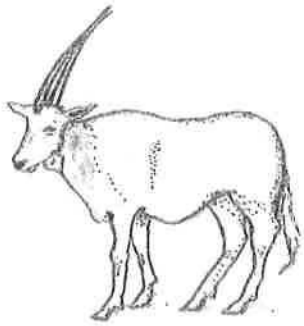
③両親が協力して子育て
― フラミンゴ ―

野生では中南米・南米やアフリカの水辺に生息する大型の水鳥。当園にはベニイロフラミンゴ、チリーフラミンゴ、コフラミンゴの３種類36羽が飼育されています。エサはフラミンゴ用のペレットやオキアミを与えています。

2024年10月に、当園では6年ぶりとなるベニイロフラミンゴのひなが誕生しました。父親と母親の両方からフラミンゴミルク（食道にある「そのう」という器官で作られる栄養液）をもらい、すくすくと成長し、体の大きさは成鳥と変わらないくらい大きくなりましたが、幼鳥特有のグレーの羽はまだしばらく見ることができそうです。ぜひ今だけのかわいい姿を見にいらしてください。また、フラミン子の愛称で公式Ｘでも様子を知ることができます。

④絶滅から救いたい　美しい動物
― シロオリックス ―

ウシの仲間の堂々たる体格と弓なりにカーブした長い角。白い短毛の体に独特の茶色い模様。アフリカの砂漠や乾燥地帯に生息するため、水をあまり飲まなくても生きられる強靭な生命力。そんな魅力がいっぱいのシロオリックスですが、人間による角と肉を目的とした乱獲と干ばつのために2000年には野生では絶滅したと考えられています。その後、飼育された個体を野生に戻す取り組みが始まり、アフリカのチャドでは2016年に21頭が保護区に放されました。2023年には140～160頭ほどに増えているのが確認されています。



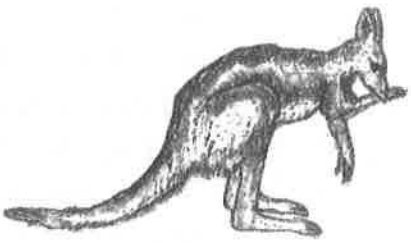
当園にいるのはオスのグランデ（16歳）とメスのビビ（9歳）。今年は繁殖を計画しており、よく観察してタイミングを計りながらお見合いを進める予定です。

⑤不思議がいっぱい
― オオカンガルー ―

カンガルーのうち一番大きいのはアカカンガルーで、当園にいるのは二番目の大きさのオオカンガルー。「カンガルー」とは生息地オーストラリアの先住民の言語で「跳ぶもの」の意味です。

飼育係さんに聞いたカンガルーの特徴は…

①跳ねる力が強く、ひとっとび13m位。②暑さに弱く、体温調節は前足をなめて冷やす。③オス２頭でキックボクシングみたいな激しい戦いをすることがある。④生まれたての赤ちゃんは体長2cm、体重１ｇの１円玉と同じ位の小ささ。そんな未熟児の赤ちゃんが、自分で這いあがって母親のおなかの袋に入りさらに成長する。オスのおなかに袋はない。⑤天敵は人間。自動車道で生息地が分断され、繁殖に影響が出ている。



ほかにも不思議なことが沢山あるおもしろい動物です。ゆっくり観察してください。

⑥上手に割れるかな？
― エジプトハゲワシ ―

ヨーロッパ南部・アフリカ・中東・インドに棲む小型のハゲワシで、寿命は30年くらい。当園では過去に計６羽を飼育してきていますが、現在残っているのは展示の１羽（メス）だけで、海外からの導入が難しくなっているため、国内の飼育数（JAZA加盟園館）は当園を含めて２羽だけになっています。

野生ではおもに動物の死体を食べますが、大きなダチョウの卵を口でくわえた石をぶつけて割り、頭を突っ込んで中身を食べる習性があり、数少ない「道具を使う鳥」として知られています。

５月ごろ当園のダチョウが産卵したら、その卵を与えるところが見られるかもしれません。

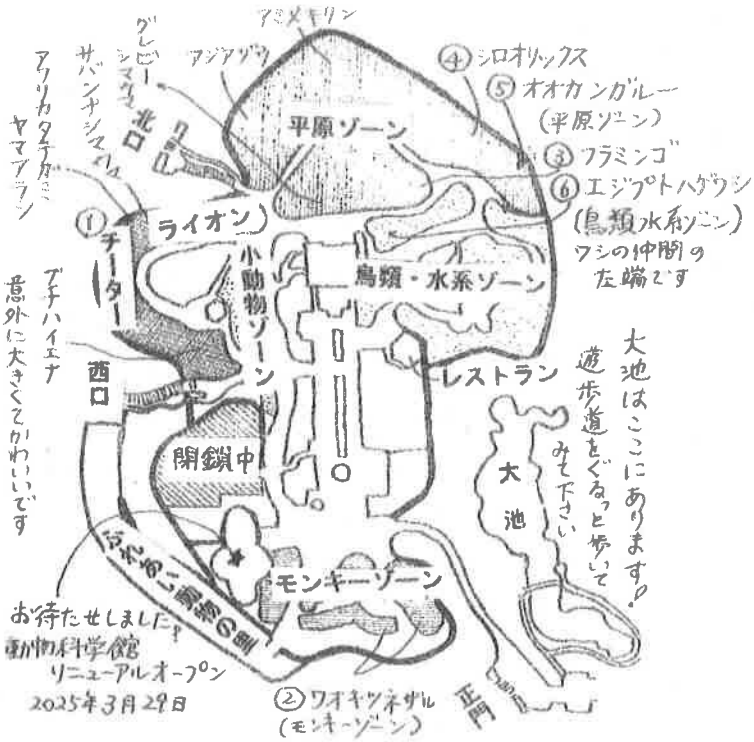
（JAZA：公益社団法人日本動物園水族館協会）

★ボランティアが毎月第２、第４日曜にクイズ形式の動物ガイド「ZOOポラ・クイズ・DEガイド」をしています。当日園内放送でお知らせしますので、ふるってご参加ください。

★それぞれの動物がいる場所は下の地図をごらんください

《番外》生き物いろいろ
― 大　池 ―

大池は 1985 年の開園当初より野鳥を観察できる場所として造られました。カモ、サギ類など水鳥のほか、さまざまな野鳥が訪れ羽根を休める姿が見られます。動物の展示場とはまったくちがう雰囲気の、深い緑に包まれたひっそりとした空間で、とくに紅葉の季節にはその美しさに息をのむほどです。モノレール駅に近い正門から入るとすぐ目の前にあるのですが、木々に囲まれて低い位置にあるのと入口がわかりにくいために、多くの来園者がその存在に気づいていません。

モツゴ

園では奥の方３分の１ほどのエリアを立入禁止ゾーンとして生物の保全につとめ、2023 年に専門家に生物調査を依頼しました。その結果、水中にはモツゴ、クロダハゼなどの魚やスジエビなどの生物、地上と地中ではさまざまな昆虫やムカデ、ミミズの仲間、珍しいクモなど多様な生物が見つかりました。一方で、だれかが池に放したアメリカザリガニが大量に繁殖したり、コイにエサをやる人がいるために水質が悪くなったり、お菓子の包装紙などのゴミが散乱するといった問題もあります。さまざまな在来生物が生き続けることができるよう、環境の保全に皆さまの協力をお願いします。